

授業力向上を図るための校内授業研究会のあり方

～研究主任が校内の研究風土を培うための取組を整理する中で～

カリキュラムセンター指導主事

藤中 大洋 南谷 隆行 縄田 芳信 須山 佳代子

I 主題設定の理由

1 時代背景・センターの取組

平成14年2月中央教育審議会答申「今後の教員免許制度のあり方について」の中で、教員の資質能力の向上にとって校内研修は「特に重要」と位置づけられ、「校長のリーダーシップの下、各学校において、教授技術、教材研究、各学校や地域の具体的な教育課題等について、各教員が相互に評価し合うことなどが必要である。」と提言された。また、平成18年7月同答申「今後の教員養成・免許制度のあり方について」では、「教員同士が学び合い、高め合っていくという同僚性や学校文化を形成することが必要である。このため、個々の教員の能力向上だけでなく、学校におけるチームワークを重視し、全体的なレベルアップを図るといった観点から、校内研修の充実に努める必要がある。」と示された。

本市では、川崎市教育プランの重点施策3において「学校の教育力を高め、確かな学力を育成する」を掲げ、教員の授業力向上に向けた取組を推進している。各学校では、授業改善を軸にした学校づくりへの取組が進められている。授業づくりを通して教員の同僚性を高め、互いに知恵を出し合い、高め合っていく風土を学校に根付かせていくために、校内授業研究の充実に努められている。

川崎市総合教育センターにおいては、こうした流れを受けてセンターで行われる研修だけでなく、指導主事が学校に出向いて授業力を高めるための校内研修に力を入れてきた。拡大要請訪問では、授業について話し合う分科会を大切にし、成果をあげている。

また、昨年度「授業力向上こだわりハンドブック」を作成した。作成にあたっては、教員同士が学び合い、高め合っていくという同僚性や学校文化を形成することと、日頃の授業を見直す視点をわかりやすく示すことに努めた。

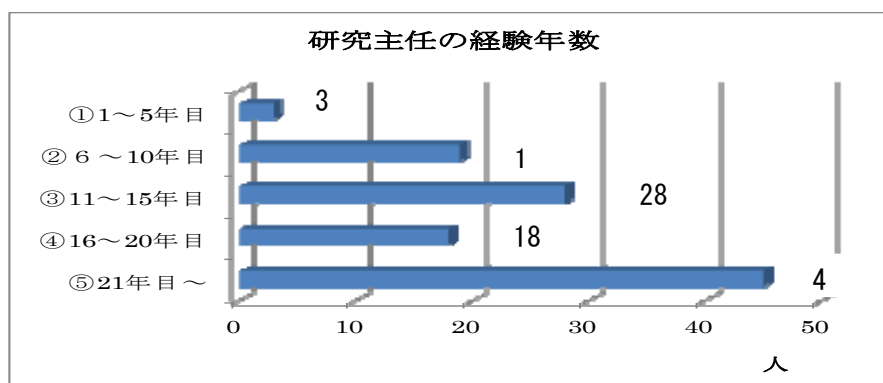
2 研究テーマの設定

(1) 授業改善を軸にした学校づくりを支援する

各学校では授業改善を図ることが子どもたちの学校生活をより充実させることにつながるという考えのもと、校内授業研究に熱心に取り組む姿が見られる。このような状況において、研究主任の果たす役割は一層重要になってくる。カリキュラムセンターでは、各校のそのような取組を支援するために、研究主任が中心となって個々の教員の実践の「よさ」を生かし、それらを共有し、広げていくことができるような授業研究会のあり方を整理し、明らかにしたいと考えた。

(2) 校内研究主任の経験年数

表1 川崎市立小学校の研究主任の経験年数



各学校において本来なら研究推進の担い手となるような十分に経験を積んだ教員が少ないのが現状で、教員経験10年未満で研究主任を任されるケースも少なくない。こうした状況の中、研究主任は、どのような思いで研究推進に取り組んでいるのかを調査し、その結果を分析することで、経験年数の少ない研究主任を支え、互いに知恵を出し合い、高め合っていく風土を根付かせる校内研究を推進していくための方策を明らかにし、提案したいと考えた。

以上のことから、研究テーマを

授業力向上を図るための校内授業研究会のあり方

～研究主任が校内の研究風土を培うための取組を整理する中で～

として研究を進めることにした。

II 研究の内容

1 研究の方法

(1) 研究主任が、校内の同僚性を高め、授業力の向上につながる校内授業研究にしていく上での現状と課題を明らかにする。

① 小学校研究主任にアンケートを実施し、川崎市立小学校における校内研究の現状と課題を明らかにする。

② 若手研究主任との話し合いの中から、同僚性を高めながら子どもたちの学力を育てる校内授業研究のあり方についての現状と課題を明らかにする。また、その中で、研究主任がどのような授業研究会を計画することが学校の同僚性を高め、授業力の向上につながるのかを明らかにする。

(2) 指導主事が拡大要請訪問等での授業力向上に関する成果と課題を整理し、研究主任がどのような授業研究会を計画することが学校の同僚性を培い授業力の向上につながるのかについて提案する。

2 研究の実際

(1) 研究主任の声から見えてきた現状と課題

① 小学校研究主任へのアンケートによる分析

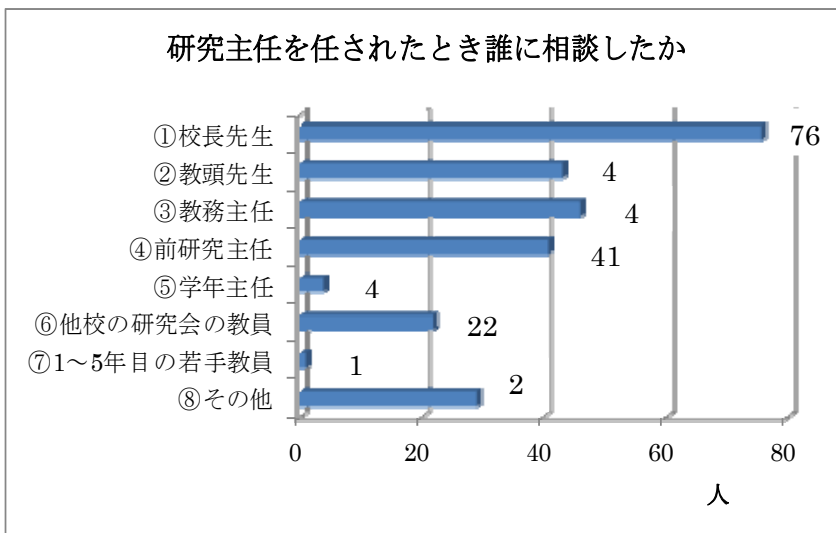
次に示す要領でアンケートを実施した。

調査対象 川崎市立小学校研究主任

調査期間 平成23年12月12日～21日

調査目的 研究の土台となる基礎データの収集

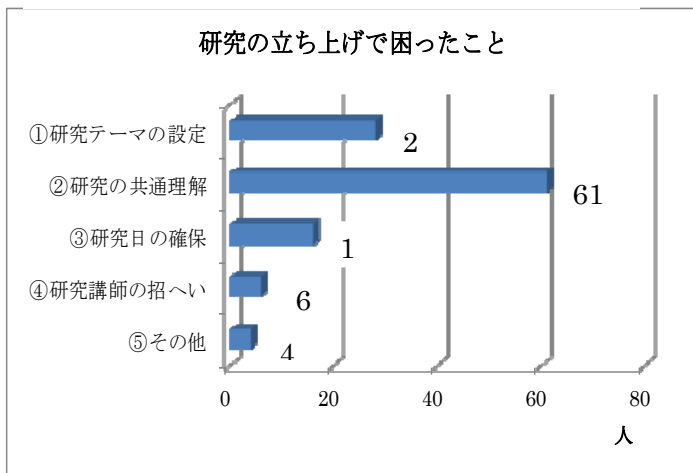
表2 研究主任についての相談相手の回答



－表2の考察－

ほとんどの研究主任が校長、教頭、教務といった管理職に相談している。他校の教員への相談件数が多いのは川崎市の研究会組織がしっかりしているからと思われ、川崎市の一つの特長と考えられる。

表3 研究の立ち上げで困ったことに対する回答



－表3の考察－

①、②の数が多いことから、研究主任が研究を進めるにあたり、教員の共通理解に重点をおいたと読みかえることができる。理由として、「教員が研究に対して前向きではない」「研究に対して共通理解を図ろうとしても、その意が伝わらない」「取り組みたい教科や方法で見解の相違の溝を埋めるのが難しい」などが考えられる。

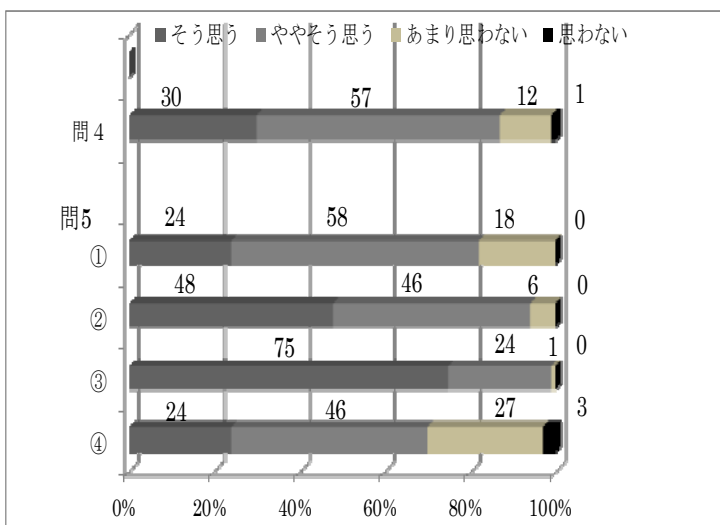
問4及び問5は4件法で実施した。質問内容は、以下の通りである。

問4 研究はうまく進んでいますか。

問5 校内研究の様子について教えてください。

- ①子どもたちが確かに変わっていると実感できる
- ②研究協議のときに職員が活発に意見交換している
- ③講師が毎回指導に役立つ話を聞かせてくれる
- ④校内の先生が研究について日常的に話し合うようになった

表4 研究の取組状況及び様子についての回答



－表4についての考察－

問4で「そう思う」「ややそう思う」を含めると85%に達することから各学校が、校内研究をうまく進めている状況がうかがえる。また、このデータ上では示していないが、問4で「そう思う」と回答した学校ほど問5での回答結果もよいことが分かった。

問5①～④のアンケート項目では、④の回答が「ややそう思う」までを含めての数値が70%で最も低い。したがって、校内授業研究会を基に日常的に話し合うことが課題であると言える。研究主任の取組として、研究内容の共有化と日常化を図ることが望まれる。

アンケートの結果から明らかになったことは以下の通りである。

- 研究主任を任されたときに相談する相手は管理職、とりわけ校長が多い。
- 研究の方向性を打ち出し、共通理解を図る段階で困難を感じている姿がうかがえる。
- 校内授業研究がうまく推進できていると感じている学校は、「ややそう思う」を含めると80%以上の学校に達している。また、校内研究の様子について聞いた問5の①～④までの質問に対しても、「ややそう思う」を含めた数値はいずれも70%以上となっている。
- 校内研究の状況を聞いた問4及び問5に対する回答から、各校の取組が順調に進んでいると読み取ることができる。しかし、「そう思う」と回答した数値だけを取り出して見ると、問5の③「講師が役立つ話を聞かせてくれる」以外は、50%を切っている。特に、①「子どもたちが確かに変わっていると実感できる」、④「校内で研究内容について日常的に話し合うようになった」での数値が、他の項目と比べて落ち込んでいる。このことから、「研究の内容について日常的に話し合うこと」や「子どもの変容に基づいた教員の手ごたえ」といった部分については、まだ課題が残されていると考えられる。

②若手研究主任の思いを聞き取る中から

若手研究主任に対しての聞き取りの中で、研究主任として校内研究を進めていく上での悩みを直に聞き取ることを試みた。また、組織体として機能を図る観点から、校内授業研究会を活性化させることで、教員の同僚性を高めることにつながると考えたときに研究主任として何ができるのかを聞き取るために行った。実際に聞き取った内容を要約すると以下の通りになった。

【事例1 研究で孤立感を感じる】

私の一番の悩みは反応が無いということです。提案しても、それについて意見を出してくれないのです。いつもすんなりと通ってしまう。この前は私の授業だったので、指導案を書いたのですが、提案しても研究主任だからということで意見を言ってくれないのです。もっとみんなが意見を出し合うような活発さを求めたいのですが、忙しくて話し合う時間も十分には取れないし…。

研究通信ということで今出し始めているところです。

< 考 察 >

孤立感を感じてしまっている。誰か研究をサポートする人がいたら違っているのではないか。例えば、研究推進に関わる時間の確保は、管理職を含め検討していくことが望ましい。

研究主任が提案をしたときに、それを受けてグループ討議をする。このときにグループのリーダーを予め決めておき、打ち合わせをするなどの方策が考えられる。

研究通信は日常化をめざして取り組み始めたものと思われる。しかけてとして研究主任がまず動いたことは若手らしいアイデアとして注目できる。

【事例2 研究を進める上での管理職の重要性】

「あなたが研究主任だよ」と前から言われ続けていたので、仕方ないかなと思っていました。ただ、昨年度の研究のまとめが個々ばらばらな状態だったのでどうやって意見をまとめていったらよいかはすごく悩みました。校長先生に相談したら、春休みに校長先生、教頭先生、前研究主任を含めた6人で話し合う場をセッティングしてくれました。同じ年代も多かったのですが、その場で話し合ったことを仲間にも話し、ちょっとずつ浸透させていきました。

< 考 察 >

昨年度までの状態に対して校長先生自身も課題を抱えていた。そこで、研究主任からの相談を待ち、2人ではなく6人で話し合う場をセッティングした。課題の共有化を図り、チームとして研究を行っていくと考えたと思われる。また、研究主任が研究を推進していく上でサポートしていく体制を整えるという意味で春休み中のセッティングは効果的であると考えられる。

【事例3 研究主任の立ち位置がわからない】

研究主任を任されたときに研究協議でどこまで言ったらよいかとか、学年で研究を進めてもらっているときにどこまで自分が関わっていったらよいのかなど立ち位置でいつも悩みます。今回、こうした研究主任同士の話し合いの場を設定してもらって、自分だけでないのだなということが分かり、ほっとしました。これから年度初めにこのような場を設定してもらえるとありがたいです。

< 考 察 >

自分の考えを強く打ち出すことをためらっている様子うかがえる。研究を推進していく立場として、自信をもって他の教員と関わることを期待したい。何をめざした研究で、大事なものは何かを共有化できるような提案を意識し、周りの教員を巻き込むような方策を考えていく必要があるのではないだろうか。

【事例4 ベテラン教員を巻き込む】

研究に対する考え方がばらばらだったので、とにかく雑談をしてコミュニケーションを取ろうと考えました。ベテランの教員に対しては、こちらも悩んでいるのですが、どうすればよいのでしょうかと相談を持ちかけるように話しかけました。そうするといろいろとアドバイスがいただけました。あと、若い教員が積極的に意見を言うと、それに引きずられるようにしてベテランの先生も言ってくれるようになりました。

【考察】

ベテランの教員は実践の経験が豊富である。うまくいった事例もあれば失敗から学んだ事例もある。したがって、共に考えていきたいので助けて欲しいというスタンスが大切であることがわかる。また、その場が硬直してしまうと遠慮してなかなか言えないのだが、若手の先生が自由な雰囲気を作るとベテラン教員は触発される。そういう意味では若手教員がのびのびと研究協議に参加することで、語り合う雰囲気作りが進むと考える。

《聞き取りのまとめ》

- 【事例1】と【事例2】を比較すると研究主任の対照的な様子が見られる。経験年数の少ない研究主任をサポートする体制の重要性が読み取れる。また、【事例2】では、研究主任をサポートする体制をつくる上で、管理職の「しかけ」が効果を上げている。
- 【事例3】と【事例4】の比較から、校内研究の推進には職場の人間関係が大きな支えになっていることがわかる。研究主任として各教員の主体性を尊重する姿勢は大切だが、まずはお互いの意見を自由に言い合える雰囲気をつくることが重要である。また、知恵を互いに出し合い、高め合っていく研究風土を形成するために、研究主任が視点を明確にして研究を進めていくことが重要である。

これらのことから、研究主任が授業力を高めるための授業研究会を行う上で留意すべき点を以下のようにまとめた。

- 研究主任は研究の方向性を教員に理解してもらうために、簡潔な言葉でわかりやすく説明することが大切である。
- 研究主任は授業研究会では、各自で考えたことを自由に出し合う雰囲気づくりに努めることが大切である。
- 研究主任は話し合いの内容を整理・分析し、次につながる示唆をする必要がある。

(2) 拡大要請訪問等や各校の実践から見えてきた授業研究会のあり方

カリキュラムセンターでは、年間24回の拡大要請訪問を実施してきた。拡大要請訪問での全体研修会で各学校の要請に応じた研修を行っている。今年度は「授業力向上」をテーマとした全体研修会を希望する学校が多く、各指導主事が全体研修の進行役を務めてきた。(図1, 2, 3) この拡大要請訪問における「授業力向上研修」でカリキュラムセンターがどのような研修を行い、何を伝えてきたのかを振り返った。



図1



図2



図3

また、カリキュラムセンターの指導主事が各教科等の研究推進校をはじめ、学校からの要請に応える形で参加した数多くの授業研究会を通して、授業研究会のあり方について以下の4つのポイントが明らかになってきた。

① 授業研究会における参加者の会話量を増やす

授業研究会では、授業中の教師の動きや児童生徒の姿を通して感じたことをお互いに出し合い、共有することが大切になる。そのための方策として、少人数でのグループ討議という形態に取り組む学校が増えてきている。肩の力を抜いてリラックスした雰囲気の中で会話することで、お互いの本音を出し合うことができる。さらに、少人数で意見交換することにより「問い返し」が生まれ、参観者同士で双方向の意見交流が可能になる。このことで授業の見方が深まったり、広がったりする効果が期待できる。(図5)

また、経験年数の少ない教員にとっては、授業の考察だけでなく、日常の授業の中で困っていることや悩んでいることなどと絡めて話す機会となり、参加意識を高めることにもつながっていた。

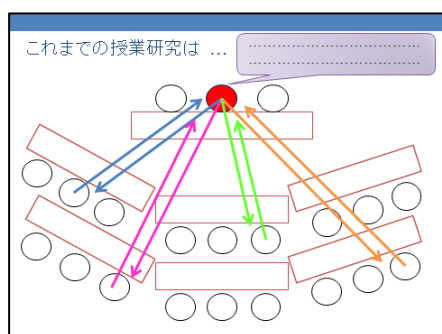


図 4

グループでの意見の交流は、参観者同士の双方向の意見交流という面で効果が期待できる。

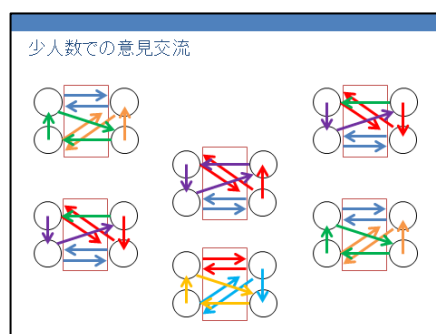


図 5

<期待する研究主任のはたらき>

- 話し合う内容を明確化・・・教師の働きかけや子どもの動きはどうだったか等。
- グループ編成の工夫・・・ベテランと若手のバランスを考慮し、意見交流を活性化させるために、各グループにキーパーソンを配置する。

② お互いの考えを可視化する

付箋紙やカード、模造紙等を使い、互いの考えを目に見える形で表すことで、授業の中で見られた教師や児童生徒のよさや課題が明確になる。グループ討議の際に作成した成果物を他のグループと交流することも授業改善の視点を明確にするうえで効果的である。



図 6

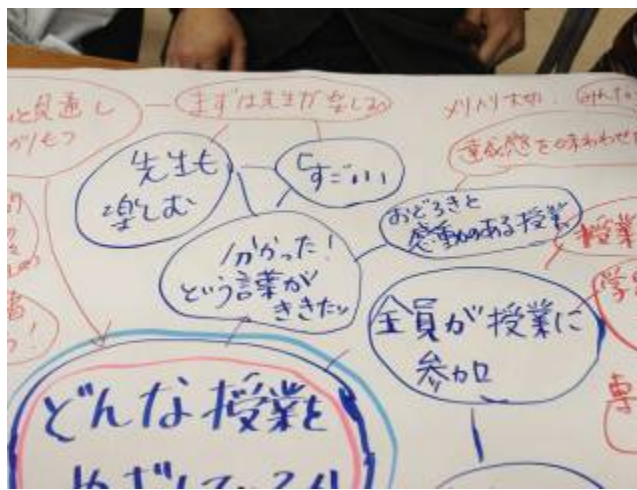


図 7

- ・互いに自分の考えをカードに記入し、机の上に並べていく。
カードや付箋紙を活用することで操作が可能になり、それぞれのカードを見ながら、共同作業で関連のあるものをまとめたり、並べ替えたりしながら授業を振り返る視点を焦点化していく。(図6)
- ・出された意見を模造紙に書き込んでいく。
中心に授業づくりの視点を書き込み、そこから放射線状にお互いの見方が広がっていることがわかる。自由に意見を出し合うことで、共感したり、新たな考え方に気付いたりしていく。(図7)

<期待する研究主任のはたらき>

○手法の習得と目的に応じた使い分け

「思考を広げる手法」「課題を分類、分析する手法」「実践に結びつける手法」等、様々な手法が提唱されている。目的に応じて使い分けられるように知識とスキルを身に付けておく。

(これらの手法はセンターの研修でも取り入れているので、参考にしていただきたい。)

○校内研究の進行段階によって、目的を明確にすることが重要になる。

③ 子どもの姿をもとに授業を語る

参観者が授業記録をしっかりと取ることで、子どもの姿を通じた考察が可能になる。授業研究会では、教師の発問や働きかけ、それに対する児童生徒のつぶやきや表情を記録しておき、それをもとに授業を振り返り、児童生徒の学習する姿をもとに協議することが大切である。前出のように、授業後にグループでの協議を行うのであれば、あらかじめ特定の児童生徒やグループを見るように決めておくことも効果的である。こうすることで、子ども同士のやり取りの経過や思考の変容の様子が記録として残り、研究協議の中で、授業のねらいに迫る学習がなされたかを具体的に検証することが可能になる。(図8, 9参照)



図 8



図 9

<期待する研究主任のはたらき>

○授業記録を取る際の着目点を明確にしておく

授業研究会の目的を意識し、あらかじめ授業記録の取り方を明確にし、参観者に伝えておくことで、その後の研究協議で授業を振り返る視点が明確になるという効果が期待できる。

授業記録シートを作成し、記録の取り方をわかりやすく示した実践も見られた。

(例)

グループ 児童名	別紙の図をもとにして観察をしてください。つぶやきはこの紙に書いてください。 ○ 本人のつぶやきや行動をつぶさに記録する。 ○ 行動が変わったきっかけ(教師の言葉かけ、友だちの声かけ)など横の欄に記入する。		
	本人	他者	本人

他者とのかわりの中でどのように思考が深まっていったのかに着目した実践
(長沢小)

④ 次へつながるキーワードづくり

研究協議の内容を整理し、それをキーワードに示すことができると、一人一人の教員はそれを教室に持ち帰り「自分の教室で実践してみよう」と行動に移すことができる。この「次へつながるキーワードづくり」は、研究主任一人に任せるのではなく、チームとしての取組に期待したい。授業研究会後に研究推進を担当するメンバーが意見を出し合い、検討していくことが効果的であると考えられる。大切なのは、今日の授業研究会と次の授業研究会をキーワードでつなぎ、その間の普段の授業を“それぞれが実践する場”として位置付けることにある。

<期待される研究主任のはたらき>

研究推進委員の意見をうまく生かしながら、これまでの研究内容と今回の授業研究会の内容を合わせて方向性を考えることが求められる。すでにキーワードがある場合はそれを軸に検証することができる。また、まだキーワードがなければ、今回の授業研究会をもとに研究推進を担う者がチームとしてキーワードを考えることが大切である。その際、研究の進捗状況を考慮して「次の一手」を考えていくことが重要で、この場面では、管理職や講師の知識や経験を活用したい。

Ⅲ 研究のまとめ

校内授業研究会では、授業研究を通して教師一人一人が授業力を付け、子どもたちに確かな学力を身に付けさせることをめざすことが重要である。その意味では、授業を公開した教師の授業改善を考えるだけでなく、参観者として授業研究会に参加した一人一人の教師が、最終的には「自分の授業をどう改善するか」という視点で自らの授業を振り返ることが大切である。

現在、市内の学校では授業力向上に向けた取組として授業研究が盛んに行われている。そこでは少人数での意見交換の場が設定されたり、付箋紙や模造紙等を使ったワークショップ形式の研究協議を取り入れたりするなどの工夫が見られる。そのような取組を行っている学校では笑顔で授業について語り合う姿がみられ、教員間の同僚性を高めるという意味で成果を上げてきている。

今後は子どもたちの確かな学力の確立に向けて、研究協議で議論された内容をより多くの教師が普段の授業の中で実践していくことができるように研究内容を日常化していく取組が期待される。カリキュラムセンターとしても、「きっかけづくり」から一歩踏み込んだ支援の方法を工夫していきたい。